デルの解説を中心とした行動生態学研究入門書. (TK)

行動生態学（原書第2版）. —J. R. クレブス・N. B. デイビス. 1991. 山岸 哲・巌佐 庸（訳）. 蒼樹書房, 東京. 454 pp. ISBN 3045-002046-4256. ¥6,695.［原書: An Introduction to Behavioural Ecology, 2nd ed. John R. Krebs and Nicholas B. Davies. 1987. Blackwell Scientific Publications, London, UK.］行動生態学の標準的入門テキスト. (TK)

利己的な遺伝子. —R. ドーキンス. 1991. 日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二（共訳）. 紀伊国屋書店, 東京. 548 pp. ISBN 4-314-00556-4 C0340. ¥2,800.［原書: The Selfish Gene, New ed. Richard Dawkins. 1989. Oxford University Press, London, UK.］従来の生物観を根底から揺るがした行動生態学・社会生物学の理論書. (TK)

生物の社会進化. —R. トリヴァース. 1991. 中島康裕・福井康雄・原田泰志（訳）. 産業図書, 東京. 18＋582 pp. ISBN 4-7828-0061-4 C3040. ¥6,200（税別）.［原書: Social Evolution. Robert Trivers. 1985. Benjamin, Cummings.］社会生物学・動物行動学の理論を知るためには必読の書. (TK)

魚類一般

サメ・ウォッチング. —V. スプリンガー・J. ゴールド. 1992. 仲谷一宏（訳）. 平凡社, 東京. 273 pp. ISBN 4-582-54221-2. ¥1,800（税込）. 原題は "Sharks in Question" で Smithsonian Answer Book というシリーズの中の一冊. えてしてこの手の本は俗っぽくなるが, まったくそんなことはなく, 非常に読みやすく勉強になる. 教科書にしてもよいのではないだろうか. (MM)

週刊朝日百科『動物たちの地球』第4巻（85-94号）魚類. —1993. 朝日新聞社, 東京. 各号32ページ程度. サイズ234×298 mm. 各号520円程度. グラビア週刊誌としてわれわれの目を楽しませてくれているこのシリーズも, 鳥類, 哺乳類, 昆虫などを経て, 10週にわたり魚類の部が刊行された. カラーの生態写真が主であるが, 最新の記事・情報も含まれている. (TS)

その他

上手な学会発表のために: Mac と IBM-PC によるプレゼンテーション. —川口吉太郎・Y. C. リー・掛樋一晃・三木康義・岩城正宏・鈴木茂生・林 浩司. 1993. 秀潤社, 東京. 266 pp. ISBN 4-87962-117-X. ¥3,800（税別）. いま流行の"デスクトッププレゼンテーション (DTPR)"を学会発表に絞って解説した本. 効果的なプレゼンテーションについても多くのページを割いており, 学会発表の入門書としても最適. (MM)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
40(1): 122-123, 1993

ヨーロッパの博物館の研究者の動向
News on Some Ichthyologists of the Major Museums in Europe

ヨーロッパの博物館の研究者に関して, 暗い情報が飛び込んできたのでお伝えする. いずれも会員にとって重要な人たちに関することである. 最初は訃報である. 3月中旬に, コペンハーゲンの Bertelsen が肺癌のため亡くなった. コペンハーゲンの博物館の魚類部門は, 彼と Nielsen によって支えられてきた. Bertelsen が深海性アンコウ類の大家であったことは, よく知られている. 魚類学界は, Gibbs に続いて深海性魚類の第一人者をまた一人失った. パリでは, Bauchot 女史が博物館を去った. 彼女は定年で退職した後も博物館で毎日仕事をしていた. しかし, 彼女から来た最近の手紙によると, 若い人たちに研究室を譲らねばならず, 博物館で研究することができなくなったということである. 彼女は「まだやりたいことは山ほどあるが断念せざるを得ない」と述べている. 博物館の内部事情はかなり複雑で, それが彼女にとって不幸な結果を引き起こしたのであろう. 彼女は博物館の魚類標本や文献に関する生き字引であった. 彼女が博物館を去ったことは, パリの博物館にとっての損失であるばかりではなく, 世界の魚類学界にとっても大きな損失である. 博物館の標本や文献の故事来歴を知る人

の価値は，まことに大きい．これから我々は，そのことを否応なく知らされることになるであろう．なんといってもパリの標本にはタイプが多く，しかも標本に関する情報は入り組んでいて，その歴史をたどるのは容易なことではないからである．もう1人，魚類学者が最近パリを去った．Guido Dingerkus である．彼はアメリカ人であり，パリに彼が就職したときには，多くの人たちが驚いた．1991年の秋に私がパリを訪れたときには，独身生活を楽しんでいて，毎日，昼食と夕食をともにしたことを思い出す．そして，その直前に，ORSTOM の Séret と一緒にニューカレドニアの調査に行った話を聞かせてくれた．そのときは，ニューカレドニアの淡水魚のスライドを数多く見せてくれて，興味ある発見がかなりあり，今後も調査を続けるのだと話していた．彼から直接聞いたわけではないが，彼がパリを去った理由もかなり複雑らしい．現在，彼はアメリカに戻っているそうである．大英博物館では Gordon Howes と Jim Chambers が辞職した．現在の博物館の方針に失望したためである．故 Peter Whitehead も同様の理由で博物館を去った．これで大英博物館の研究者は，Nigel Merrett と Darrell J. Siebert の二人になってしまった．研究助手などは残っているから，博物館の魚類部門の活動は維持されるであろう．しかし，Howes と Chambers はパリで言えば Bauchot 女史に匹敵するような人物であったから，大英博物館魚類部門の弱体化はいなめない．Howes と Chambers が辞職しても新しい研究者が魚類部門に来るかどうかは疑問である．サッチャー政権以来の厳しい状況は依然として改善されていないので楽観はできない．栄光のある，そして世界の博物館の中でも資料価値のきわめて高い標本を保管している大英博物館魚類部門の巻き返しを祈らずにはいられない．

（松浦　啓一　Keiichi Matsuura）

魚類学雑誌
40(1): 123-125, 1993

生態学会シンポジウム
『闘う生態学：京大 vs. 大阪市大—魚類の社会行動と繁殖戦略をめぐって』
"Battle of Ecology: Kyoto University vs. Osaka City University—On the Social Behavior and Reproductive Strategies of Fishes." Symposium at the 40th Annual Meeting of the Ecological Society of Japan

第40回日本生態学会大会が1993年4月2日から4日にかけて島根大学（松江市）で開催された．約400件の一般講演のほか，公開シンポジウム，4つの自由式シンポジウムと12の自由集会が行なわれた．そのうち魚類に関連したものとして，上記タイトルの自由式シンポジウムを主催したので報告しておきたい．

生態学会大会においては数年前から，魚類研究者間の議論を深め，親睦をはかるため，「魚類の行動と社会」という自由集会をシリーズで開催してきた．ちなみに過去のテーマは以下の通りで，毎回3,4人に発表してもらい討論を行なってきた．

第1回 (1987)　サンゴ礁魚類のなわばり構造について
（責任者：狩野賢司）
第2回 (1988)　性転換をめぐる諸問題
（責任者：幸田正典）
第3回 (1991)　個体変異，個性をめぐる諸問題
（責任者：幸田正典）
第4回 (1992)　繁殖における代替戦術
（責任者：桑村哲生）

今年は第5回を行なう予定であったが，その企画を考えるうちに「闘う生態学」というメインテーマが浮上してきた．このテーマなら魚類以外の研究者にもアピールできるだろうということで，シンポジウムのほうに申し込むことになった．

『闘う生態学』とは，たんに研究内容について議論を闘わせるだけではない．議論のあと参加者（聴衆）に挙手を求め，どの発表がよかったかを評価してもらおうという試みである．他の発表者と闘って「勝つ」ことを目標に，各発表者がより真剣に講演準備に取り組むことを，そして評価された結果を今後に活かしてくれることを期待した．一方，参加者には評価・挙手しなければならないというプレッシャーをかけることによって，より真剣に講演を聴き，より積極的に議論に参加してくれることを期待した．また，人を評価することによって，参加者1人ひとりが自分自身の研究を批判的に評価しなおす契機になればとも考えた．要するに，マンネリ化した学会を楽しく，刺激的なものにしようという狙いである．

もう1つ，このシンポには目的があった．それは研究内容について議論・評価するだけでなく，発表技術・方法（プレゼンテーション）も議論・評価の対象とした点である．生態学会あるいは魚類学会に限ったことではないが，わかりにくい発表，工夫のない発表，人に理解してもらおうという努力の足りない発表が多すぎると以前から感じていた．たとえば，原稿の棒読み，小さな数字の並んだ読めないスライド，データの羅列でポイントのつかみにくい筋立て，おもしろさをアピールしようとい

う工夫のなさ，質問もできない時間超過，etc. 口頭発表に関するマニュアルを一度も読んだことがないのかとさえ言いたくなる．どんなにすばらしい研究も，理解してもらおうという工夫がなければ話にならない．理解してもらってはじめて議論が発展するのである．一般に，わかりやすく工夫された発表は，研究内容もよいことが多い．人に理解してもらおうと努力することが，研究スタイルにも研究内容にもよい影響を及ぼすのである．発表方法はたんにテクニックの問題ではない．こういうことも学会で議論する必要があると考えたのである．

このような開催趣旨と対戦・評価方法を開催責任者（桑村）が説明した後，次の6つの講演を行なった．なお，1人の持ち時間は一般講演と同じ14分30秒（講演時間12分）とし，発表方法に関する質疑応答の時間は別に設けた．

1回戦（マスターコース対決）

水島　希（京都大理）：ミスジリュウキュウスズメダイの繁殖戦略

藤田　弘（大阪市大理）：カサゴの繁殖生態

2回戦（オーバードクター対決）

中嶋康裕（京都大理）：透明なハゼの不透明な生活

服部昭尚（大阪市大理）：繁殖地位の獲得戦略としてのクマノミの雄性先熟

3回戦（ドクターコース対決）

薮田慎司（京都大理）：ミスジチョウチョウウオのlateral displayは，なぜ排他的個体間と友好的個体間の両方で用いられるのか？

馬場玲子（大阪市大理）：オヤニラミとムギツクの繁殖生態

ここでは各講演の具体的な内容は紹介しない．興味のある方は生態学会講演要旨集 (p. 16–21) を見ていただきたい．身近にない場合は，直接各発表者にコピーを請求して下さい．

さて当日，参加者には評価チェックシートを配布し，各対戦ごとに研究内容と発表方法のそれぞれについて挙手を求め，その合計数の多いほうを勝者とした．その結果，接戦の末2勝1敗で京大チームが勝ち，大優勝旗（このシンポのために特注した大漁旗）が授与された．最後に，総合評価で誰が一番よかったかを改めて挙手してもらい，薮田氏が最優秀発表者に輝いた．

このようなスタイルのシンポジウムは，学会においてはおそらく初めての試みであろう．それを察したマスコミからは事前に電話取材があり，前日の新聞に（一部は数日前に）紹介記事を載せてくれた．そのせいか当日も新聞5社とテレビ局が取材に訪れた．他に4つのシンポジウムが並行して開催されていたこともあり，参加者は約90名にとどまったが，それでも会場が小さすぎて立見がでるほどだった．対戦が進むにつれ，会場は緊張と熱気に包まれてきたようだ．あまりの熱気に途中で退席したという年配の方もおられた．主催者である私も熱気に当てられてかなり緊張していたらしい（あとから気付いたことだが）．

各発表者はそれぞれの研究レベルなりに，気合いを入れて発表してくれたと思う．問題提起・目的・方法・結果・今後の課題と，論理的にわかりやすい筋立てを工夫したものもあったし，図表をカラーにするなどスライドにも様々な工夫がみられた．スライドの代わりに服に描いた魚の絵を見せるという工夫（受け狙い?）もあった．とはいうものの，明らかに準備不足とわかる発表や，相変わらず工夫のないスライドや，話題を詰め込みすぎて早口になったり，時間を超過するケースもあった．開催趣旨を十分説明したうえで講演を依頼したつもりの主催者としては，ちょっと残念．

しかし，むしろ完璧な発表ばかりでなくてよかったのかもしれない．聴衆は予想以上に真剣に議論・評価してくれたし，発表方法についても具体的な批判や改善方法の示唆を聞くことができた．多くの方は建設的な発言をして下さったが，なかには開催趣旨をまったく理解していないのではないかと思われる質問もあった．質問することも他の参加者の評価を受けるのだということがわかっていない人がいるようだ．学会での闘いは発表者同士だけではない．発表者と聴衆，そして聴衆同士も，同じ研究者として闘っているはずなのに．

何を基準に評価すべきか，挙手が妥当な方法かなど，十分に議論し尽くせなかったこともあったが，全体としては成功したのではないかと思う．いや，成功したかどうかは，発表者と参加者が今回の経験を今後どう活かしてくれるかによって決まることだ．

翌日，一般講演を聴きに行くと，相変わらずの読めないスライド，ぼそぼそと聞き取りにくいしゃべり方，構成のまずさ，時間超過の続出などにうんざりした．ひょっとしておもしろい研究かもしれないけれど，これじゃあ議論する気も時間もなくなるじゃないか．講演者は脚本家兼役者である．おもしろい台本を自分で書いて，十分に稽古して，自分で演じて，聴衆を喜ばせなければならない．1人でも多くの人を喜ばせる＝理解させ，おもしろいと思わせることが，研究者として「勝つ」ことなのだから．

しかし学会全体にこういう意識を浸透させるのは，か

なり難しいことかもしれない．今回のシンポに興味を示さなかった人達こそ，参加する必要があったのではないかと今は思う．実は今回は事前に案内状を配布するとか，学会会場のあちこちにポスターを貼るとかという前宣伝はしなかった．プログラムだけでどれほど人が集まるかをみたかったからである．新聞を見て参加した人がどれほどいたかはわからないが，結構集まってくれたと思う．その一方で，もっと大きな会場を確保して，どんどん宣伝して人を集める努力をすべきだったかと反省もしている．主催者としても初めての試みなので，大宣伝してまでやる自信がなかったのです．

最後に，今回たたき台あるいは晒し者になることを承諾して発表して下さった方たち，企画を一緒に考えてくれた中嶋さん・水島さん，司会の吉岡さんをはじめ進行に協力してくれた藤谷・坂井・大西・狩野・幸田の皆さんに感謝します．ところで，もし今回の優勝チームに挑戦するチームが出てくれば，来年の学会でも同様のシンポをやる予定です．場を変えて魚類学会でやるのもよいかもしれないと思っていますが，挑戦してやろうという方はいらっしゃいませんか?

（桑村哲生　Tetsuo Kuwamura）

魚類学雑誌
40(1): 125-126, 1993

第9回魚類分類談話会

On the 9th Seminar for Systematic Ichthyology in Maizuru, November 6-8, 1992.

京都大学農学部附属水産実験所（〒625 京都府舞鶴市長浜無番地）で1992年11月6～8日に第9回魚類分類談話会が開催された．

11月6日（金）：夕刻までに集まった人は10数名であったが，歓談しながら夕食を終えた後，各々が持参したスライドやビデオを映写して楽しんだ．

11月7日（土）：朝食後，水産生物標本館の見学を行った．その後午前10時から約30名の参加者を得て，下記の話題提供があり，活発な論議があった．

話　題

1. サバ型魚類の胸鰭と腹鰭
中村　泉（京大水実）
2. 兵庫県氷上地方のトゲウオ類について
山科ゆみ子（兵庫県陸水動物研究会）・細谷和海（水産庁養殖研究所）
3. 西オーストラリア沿岸海域（インド洋東部）のカツオ・スマの寄生虫
岩澤昭文（東海大海洋）
4. ヒラメの咽頭装置の構造と微細形質
細谷和海（水産庁養殖研究所）
5. ミノカサゴ *Pterois lunata* の2型について
戸田　実（国営沖縄記念公園水族館）
6. エイ目魚類の系統類縁と遊泳方法の関連
西田清徳（大阪海遊館）
7. Russian history of oceanic ichthyology
Nikolay V. Parin (Institute of Oceanology, Moscow)
8. 飼育下板鰓類の行動
西本周平・西田清徳（大阪海遊館）

今回はモスクワ（ロシア共和国）の海洋研究所から，日本学術振興会短期招へいで10-12月の3ヶ月間舞鶴の京大水産実験所に滞在して研究されていたパリン博士が参加されたのでとくに活発な論議が展開された．

パリン博士の講演は博士御自身の研究，「トビウオ類の分類と分布」および「タチウオ科およびクロタチカマス科魚類の分類と地理的分布」を中心に，ロシアの外洋性魚類研究の歴史を述べたものであった．講演はきわめて説得力に富み，多くの研究者の興味をひき，講演後熱心な質問があった．とくに質問が集中したのは，ソ連邦崩壊後の海洋科学分野の研究状況であった．それに対する博士の答えの概略は次のようであった：

ソ連邦崩壊後のインフレ進行中，研究費は据置のままで，数多くの海洋観測船や漁業調査船はほとんど全て港につながれたままなので，新しい調査が実施できないため研究はほとんど進展していない．博士自身，過去に得られたデータや標本に基づいて，現在の研究を進めざるを得ない．こうした状況はどの分野でも大同小異で，このようなロシア共和国の海洋科学研究の停滞を日本，西ヨーロッパ，アメリカなどとの共同研究を推進することでなんとか打破したいので，協力を希望するとのことであった．

海遊館の西田，西本両氏は水族館で観察される板鰓類の珍らしい行動や興味深い遊泳生態をビデオを用いて紹介して下さり，また沖縄記念公園水族館の戸田氏は美しいスライドを使ってミノカサゴの2型を説明下さり，多くの関心を呼んだ．その他の話題に対しても，活発な意見交換がなされた．時間制限で議論しつくされなかった分は，例年のごとく懇親会へと持ちこされたのは言うまでもない．

話題提供終了後，午後7時から懇親会が開かれた．折から京大農学部水産学科に日本学術振興会の長期招へい研究者として1992年1-12月の1年間滞在しておられたDr. John S. Burke (US National Marine Fisheries Service, Beaufort Laboratory) も参加して，東西の魚屋達のつきることのない話は秋の夜長に延々と続いた．

12月1日(日)：9時過ぎからせりの始まる見学には好都合の京都府漁連西舞鶴魚市場に車を連ねて見学に行き，次回の再会を約しつつ正午前に現地解散した．

(中村　泉　Izumi Nakamura)

魚類学雑誌
40(1): 126-128, 1993

エイラトで開催された北部紅海の深海性魚類に関するワークショップ

Workshop on the Deep Sea Fishes of the Northern Red Sea Held at Eilat, Israel

1993年1月18-29日にイスラエルの紅海側の港エイラトにあるIUI＝The Interuniversity Institute of Eilat (The H. Steinitz Marine Biology Laboratory, P.O. Box 469, Eilat 88103, Israel) で，「北部紅海の深海性魚類に関するワークショップ」が開催された．約40名の参加者が中南米を除くほぼ世界全域から集った．筆者はアジア地域からの唯一の参加者だった．

このワークショップはThe United States-Israel Binational Science FoundationとIUIの共催で開かれ，組織委員はDr. John E. Randall (Bishop Museum), Prof. Micha Spira (Hebrew University of Jerusalem) およびDr. Avi Baranes (IUI) の三名であった．

エイラト湾（アカバ湾とも言われる）は，2,600 mの最深部を有しているが，ティラン海峡で紅海本体に通じている湾口部が非常に浅い (252 m) ので，紅海本体とは隔離された独特の性格を有している．熱帯域の乾燥地帯に位置するエイラト湾は蒸発量が著しく多く，卓越した北風によるコリオリの効果が著しくて，水温躍層が見られず，周年にわたって高塩分 (40.5-41.6‰) で高水温 (21-23°C) の深層水が形成されていることが認められている．従ってエイラト湾の深海部には独特の深海性魚類も少数ながら見られるが，他の海域では沿岸性魚類であるはずの多くのものが，かなりの深みにまで生息している．

ワークショップの目的は北部紅海，とくにエイラト湾の特異性とそこに生息するこのような深海性魚類との興味深い関係を明らかにすることによって，この海域をよりよく理解しようというものであった．

ワークショップの最初の1週間は，すでにそれまで数年にわたって，カゴや立縄や小型ビームトロールなどの採集漁具で捕獲された深海性魚類標本と比較するために，時折全員で沿岸性魚類を小型地曳網で採集することもあったが，主として深海性魚類標本の同定や研究に費やされた．その合間に連日下記のような演題の講演があり，種々の論議が活発に交わされた．

時々，臨機応変にIUIに隣接した今回のワークショップに協力したCoral World水族館で，種々の会合やパーティーが催された．ことにお客が去った後に，夜水中観察塔のレストランを借り切って行なわれたパーティーは夜行性の魚達に見られているような気のする不思議な雰囲気の楽しいものだった．

講演題目

Ichthyological research in the Red Sea, from Dahlak expedition to the establishment of the IUI
L. Fishelson (Tel Aviv University)

Oceanography of the Gulf of Aqaba
B. Lazar (IUI)

Red Sea fishes—A portrait
J. Randall (Bishop Museum)

Statistical aspects of the Red Sea ichthyofauna
M. Goren (Tel Aviv University)

Zoogeography of Indian Ocean Carangidae
W. F. Smith-Vaniz (US Fish & Wildlife Service)

Zoogeography and systematics of Red Sea Callionymidae
R. Fricke (Staatliches Museum für Naturkunde)

Review of the fishery resources of the Red Sea
A. Ben-Tuvia (Hebrew University of Jerusalem)

Adaptive evolution of the fishes of Gempylidae and Trichiuridae with a comment on their distribution in the Red Sea
I. Nakamura (Kyoto University)

Lessepsian migration—new findings on the foremost anthropogenic change in the Levant Basin fauna
B. Galil (Israel Oceanographic & Limnological Research)

Red Sea fishes in the Mediterranean—general view
D. Golani (Hebrew University of Jerusalem)

Paracaesio (family Lutjanidae), an enigmatic genus of snapper
W. D. Anderson (Grice Marine Biological Laboratory)

Revision of the Indo-Pacific genus *Crossorhombus* (Teleostei: Bothidae)
D. A. Hensley (University of Puerto Rico)

Unstable and stable classifications of fishes
K. E. Carpenter (FAO)

Taxonomic database for fishes
W. N. Eschmeyer (California Academy of Sciences)

Deep reef fishes of the Comoro Islands
P. C. Heemstra (J. L. B. Smith Institute of Ichthyology)
Highly efficient planktivory by coral reef fish
A. Genin (IUI)
Foraging in the dark: do behavioral decisions interact with morphological differentiation in deep sea fishes?
F. Uiblein (Forschungsinstitut Senckenberg)
Deep sea fisheries in Australian waters
J. R. Paxton (Australian Museum)
Dwarf monocle breams of the genus *Parascolopsis*: systematics and biogeography
B. C. Russell (Northern Territory Museum)
Carbon isotopes in the ecosystem of the Gulf of Eilat, Red Sea
J. Erez (Hebrew University of Jerusalem)
Deep sea fish families of hydrothermal vents
P. Geistfer (MNHN, Paris)
Feeding strategies of deep sea benthic and benthopelagic fishes
L. Saldanha (University of Lisbon)
Fish communities, food webs and fishing
M. J. Smale (Port Elizabeth Museum)
The work of Forsskål in the Red Sea
J. G. Nielsen (Zoologisk Museum)
Different patterns of foraging based on chemoreception or visual perception in various species of moray eels(Muraenidae, Teleostei)
L. Fishelson (Tel Aviv University)
Studies on blennioid fishes
V. G. Springer (USNM, Smithsonian Institution)
Comments on the validity of *Iago garricki* Fourmanoir & Rivaton, 1979
G. N. H. Waller (NHM, UK)
Fishes of Greenland
J. G. Nielsen (Zoologisk Museum)
Egg dispersal of a Caribbean coral reef fish, *Thalassoma bifasciatum*, over a coral reef platform
D. A. Hensley (University of Puerto Rico)
Preliminary overview of reproduction in the north Atlantic oceanic ichthyofauna, via fecundity and species size spectra
N. R. Merrett (NHM, UK)
On coelacanth
H. Fricke (Max Plank Institute)
The food web of the deep-sea fishes of the Gulf of Aqaba
O. Goldshmidt (IUI)
Contrasting goby-shrimp partnerships in the Red Sea and the western tropical Atlantic
I. Karplus (Fish & Agriculture Research Station, Israel)
Reproduction in the coelacanth: Myth and reality
P. C. Heemstra (J. L. B. Smith Institute of Ichthyology)
Intraspecific egg predation by male razorfishes (Labridae) during broadcast spawning
S. C. Nemtzov (Tel Aviv University) and E. Clark (University of Maryland)

後半の1週間は観光ダイバー用のクルーズ船2はい(MY/Jadran, MY/Sunboat)を傭船してのエイラト湾と紅海本体の北部海域の魚類生態調査をするはずだったが，今回はエジプト側領海内の調査許可が直前まで出なくて，それは断念せざるをえなかった．そのためスキューバダイビングによる魚類の生態観察と写真撮影および航路上での曳縄の実行だけを余儀なくされてしまった．私の乗船した Jadran は曳縄でスマ *Euthynnus affinis* 2尾，カツオ *Katsuwonus pelamis* 3尾，コシナガ *Thunnus tonggol* 1尾，ヨコシマサワラ *Scomberomorus commerson* 1尾を釣り上げてくれた．これらは私にとっては大変すばらしい研究材料となり，研究後には私の手になる刺身や照焼をみんなに提供してくれて，好評であった．

紅海は海洋学的にも，魚類学的にも，動物地理学上からも大変興味深いところであり，またスエズ運河開通後のレセップス回遊として知られる紅海側から地中海側への動物の移動とその逆の逆レセップス回遊とは永年にわたってイスラエルの研究者の主要研究主題となって来た(Ben-Tuvia, 1966; Por, 1978; Dor, 1984)．しかし，今回顕著に見られたようにイスラエル-アラブ諸国間の友交関係が保たれない限り，充分な紅海研究の成果はあがらないだろうと思われる．

面積が我国の四国とほぼ同等，人口が約500万人で，5つの国立大学しかないイスラエルには我国ほど細分化した学会，水産学会，魚類学会，海洋学会，水産海洋学会などに類するものは多くはない．研究者はもっと大きな組織，例えば動物学会，植物学会，生化学会，物理学会などに属し，そこで活動することが多い．それ故，時々開催されるより専門化されたシンポジウムやワークショップには多くの参加者があり，大変活況を呈するとのことであった．

イスラエルとアメリカ合衆国との結びつきは強く，United States-Israel Binational Science Foundation がイスラエルの科学研究において，大きな役割を果しているように思われる．イスラエルの多くの研究者が sabbatical leave で，アメリカ合衆国への留学経験を有しているので，研究・教育の方式はアメリカ合衆国の方式とよく似ていると思われる．

今回のワークショップにエジプトから5名の研究者(Prof. D. H. Hasham, Dr. F. El Gamal, Mr. El Azab Badr El Bakhty, Mr. Abd El Menum Hassan Hamza および Mr. Abdel Rahman I. L. Shazly: いずれも National Institute of Oceanography and Fisheries, Cairo の所属)の参加があった．参加の人選が直前に行われたので，講演発表はなかったが，彼らは積極的に論議に参加した．彼らから紅

海の魚類の研究で著名な Dr. H. A. F. Gohar が昨年 IUI を訪問して，エジプトへ帰国後 2 週間で亡くなられたことと，ずっと以前に東大農学部水産学科の末広恭雄教授のもとに留学されたことのある Dr. A. R. Bayoumi が数年前に亡くなられたことを知らされた．ここにお二人のご冥福を祈る．

Dr. Heinz Steinitz の創設になる IUI はイスラエルの大学共同利用の臨海実習研究所である．紅海の魚類研究の最前線基地として大変有名で，諸研究設備とダイビング用の施設がよく整備されていることと Dor House と呼ばれる立派な宿泊設備（約 20 名収容）もあるので，国の内外を問わず，よく利用されている．日本からの利用も歓迎するとの Dr. Baranes の意向であった．利用の際は Dr. Baranes に連絡をとればよい．

なお IUI の隣りの Coral World 水族館は目もあやな多くの紅海のサンゴ礁性魚類を見ることができる大規模な水中観察塔を持ち，その他の施設もなかなか見応えがあり，充分世界の各地からやって来た魚類学者達を楽しませてくれた．

引用文献

Ben-Tuvia, A. 1966. Red Sea fishes recently found in the Mediterranean. Copeia, 1966: 254–275.

Dor, M., 1984. CLOFRES. Checklist of the fishes of the Red Sea. The Israel Academy of Sciences and Humanities, Jerusalem.

Por, F. D. 1978. Lessepsian migration. The influx of Red Sea biota into the Mediterranean by way of the Suez Canal. Springer-Verlag, Berlin.

（中村　泉　Izumi Nakamura）

増進会自然環境保全研究活動助成基金 1993 年度募集のお知らせ

1991 年 1 月に発足した『公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金』が，1993 年度の助成先を公募しています．募集要項や申請の手続き等詳しくは下記にお問い合わせください．なお，応募の締切りは 1993 年 5 月 31 日（月）（同日消印有効）となっております．

記

〒113 東京都文京区湯島 2-29-3
財団法人　自然環境研究センター内
公益信託　増進会自然環境保全研究活動助成基金事務局
Tel (03) 3812-1881

会　　記・Proceedings

魚類学雑誌
40(1): 128–144, 1993

1992 年度日本魚類学会シンポジウム『魚類の移動と回遊』

日時：1992 年 10 月 2 日（金）　午前 10 時–午後 4 時 40 分
場所：水産大学校　本館第一会議室
コンビーナー：竹下貞二・山元憲一（水大校）・藤田　矗（西水研）

趣旨説明

1. トラフグの性成熟と回遊
松浦修平（九大農）
2. スケトウダラの産卵回遊と群構造
手島和之（西水研）
3. バイオテレメトリーによる魚類の行動追跡
矢野和成（西水研）
4. 魚類の行動と呼吸機能
山元憲一（水大校）
5. 沖縄海域におけるフエフキダイ類の移動について
海老沢明彦（沖縄水試）
6. 魚類の垂直移動について
小沢貴和（鹿大水）

総合討論

1. トラフグの性成熟と回遊

松浦修平

これまでの研究によると，トラフグは沿岸の潮流の速